

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 170, 2015

VIEW 展望

イメージの総合的研究に向けて——映像学の将来への展望——／加藤哲弘…2

INFORMATION 学会組織活動報告

機関誌編集委員会…3 総務委員会…4 研究企画委員会…5
 支部・研究会だより 東部支部…5 映像テキスト分析研究会…5
 映像心理学研究会…6 ヴィデオアート研究会…7 アニメーション研究会…8
 ドキュメンタリードラマ研究会…8-10 アナログメディア研究会…10-11
 映像表現研究会…11 関西支部…18 関西支部夏期映画ゼミナール…13
 西部支部…13-15 中部支部…15-16 ショートフィルム研究会…16-18

REPORT 報告

東部支部第35回映画文献資料研究会「1950年代日本の年少観客の映画受容をめぐる出版メディア文化との比較——「教育」と「消費」のあいだで」／渡邊大輔…12

FORUM フォーラム

第6回（平成27年度）日本学術振興会育志賞…18

FROM THE EDITORS

編集後記…18

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第170号」2015年4月1日発行
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：相内啓司（委員長）・鳥山正晴（副委員長）・伊藤高志・石坂健治・遠藤賢治・橋本英治
 日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

イメージの総合的研究に向けて

—— 映像学の将来への展望 ——

加藤 哲弘

今世紀が始まる 2001 年頃から、とくにドイツ語圏では「イメージ学 (Bildwissenschaft)」という語を頻繁に眼にするようになってきた。たとえば、プレーデカンフ、ベルティング、ザックス＝ホムバッハ、さらには翻訳によるものではあるがミッチェルらの著作の表題がそうである。また大学でも、たとえば、イェーナ、アウクスブルク、ビーレフェルト、ヴィーンなどの諸大学では、学科の再編成が進むなかで、「イメージ学」が新たな専攻分野や重点領域の名称として登場してきている。

このような流行の背景にはさまざまな要因がある。おそらくその最大のものは、これまでは自明のものだと考えられてきた「芸術」の概念が相対化されてきたことであろう。芸術という語は、もう今では使いにくい。それは近代美学という特定の時代と地域に由来する価値観を前提にした言葉だからである。日本語を使うわたしたちは、それを「アート」と呼び換えて、何とかそこで何らかの普遍的な価値を維持しようとしているが、どこかに違和感が残る。

「イメージ」を伝統的な価値観によって管理してきた美術史学は、この変化に積極的な関心を示さないまま、「芸術」としての絵画や彫刻の実証的な研究に精力を傾けてきた。その間に、イメージは、新しいメディアや新しい情報環境の登場とともに、その姿を大きく変えていった。同時に、グローバル化 (異文化との接触) や大衆化 (ポピュラー・カルチャー)、脱政治化 (「かわいい」の美学) などの諸傾向が、新しいイメージの生成と増殖を後押ししている。

もちろん美術史学のなかにも、イメージ学への萌芽がなかったわけではない。たとえば『イメージ人類学』という著作を 2001 年に著したベルティングが指摘しているように、ハンブルクの美術史家で私設の「文化科学図書館」を開設していたヴァールブルクのイコノロジーは、いま生じている変化にも充分に対応できる斬新で柔軟なアイデアに満ちていた。しかし、この特異で越境的な発想は美術史学の制度化のなかで失われてしまった。その結果、イコノロジーは、作品解釈のための一つの方法論として、活動範囲が狭められることになった。

ベルティング自身も、いわば芸術以前の芸術である中世美術を対象領域にして図像と礼拝との関わりを探求していくなかで、美術史学の限界を感じていた。彼は、ヴァールブルクの文化科学だけでなく、アナール学派の歴史人類学や、マクルーハンやフルッサーらによるメディア論を方法論的考察に導入するとともに、英米語圏の、いわゆる文化研究 (視覚文化研究) との連携や対決のなかで、彼自身の「イメージ人類学」の理論的基盤を固めようとしている。またこの 15 年間における「イメージ学」の発展には、

さらに認知科学や脳科学などの「イメージ科学」、画像処理関連の諸工学部門、あるいは広告理論やコミュニケーション論、そしてもちろん映画研究や写真論も大きく貢献している。

さて、ここまでドイツ語圏の事情を長々と紹介したことには、わけがある。それは、この『イメージ人類学』という本を読んでもいくなかで、日本映像学会の「設立趣旨」を思い出したからである。

その冒頭には、この学会は「写真・映画・テレビ」という 3 つのジャンルを「一つの映像という共通の視点からとり上げる」と明言されている。しかし、そのあとすぐに「映像は、写真・映画・テレビという既存媒体の外に、著しく拡がりつつある」ことが確認され、「ジャンルの思考」や「学問的・創造的・技術的アプローチの違い」にとらわれることなく「映像と人間、映像と社会の問題を広い視野で考えなければ」ならないと主張される。そして最後の段落では、「既存の媒体を対象とする学問的研究を超え、映像という共通の問題意識を大切にし、人間と社会の未来について、自由な討論と関連な研究の場をつくり出すこと」が本学会の趣旨であり、「閉ざされた研究、限定された交流ではなく、あくまで開かれた視点に立つ総合的思考」こそが今日の文化的要請に応え、本質への問題提起を行う姿勢であるとされている。

日本映像学会は「イメージ学」を、他の分野に先駆けて早くから綱領化していた。そのことは、とくに後半部から、よくわかる。ちなみに 2001 年に制定された文化芸術振興基本法では、一方に美術や写真 (第八条)、もう一方に映画やマンガ、アニメ、実験映像 (第九条) とが、異なる芸術として切り離されてしまった。映像学には、そのような分断を越えて、イメージ学の中核となって関連諸分野を統括する総合的な学科になる可能性がある。

しかしその一方で、冒頭の記載が示すように、そこには、ある種の葛藤が存在することも事実である。基本的には中世美術の研究者であったベルティングがアイコンをめぐる「像と礼拝」の事例をもとに議論を展開しているように、イメージ学としての映像研究も、たとえそれが「芸術」性のお墨付きをもった既存の媒体であっても、専門化された基礎領域をどこかで確保して、いわば足腰を鍛えなければならない。しかし、それでは「ジャンルの思考」に引きずり込まれるおそれが出てくる。必要なのは、おそらくバランス感覚なのであろう。とはいえ少なくともわたしとしては、現在のわたしたちの生きる世界で向き合うイメージの世界が大きくその姿と内実を変貌させつつある以上は、日本映像学会が、これからも開かれたイメージ学の研究組織として総合化の方向へと展開する姿を見たいと思っている。

(かとう てつひろ / 日本映像学会副会長、関西学院大学文学部)

機関誌編集委員会

中村 秀之

機関誌編集委員会の報告と計画

21期機関誌編集委員会の委員の構成が確定しました。会報168号でお知らせした9名の機関誌編集担当理事に加えて、次の6名の会員に委員長から編集委員を委嘱しました(敬称略)。飯岡詩朗、板倉史明、応雄、西村智弘、長谷川一、堀潤之。日程の関係でさっそく9月から、以上の15名によって編集作業を始めましたが、理事以外の委員は10月4日の合同理事会で正式に承認されました。

『映像学』93号を刊行しました(2014年11月25日付)。投稿論文が10本、審査の結果、そのうち3本を採択し、依頼のレビュー(書評)7本と併せて掲載しました。関係各位にあらためてお礼を申し上げます。本報告の掲載の時点では『映像学』94号の査読を行なっています。3月15日に投稿原稿の受付を締め切り、慣例どおり、大会での配付を目標にして、鋭意、編集作業を進めていきます。

機関誌の改革についてご報告します。「学会機関誌の改革について：お知らせとお願い」(2014年末に名簿等とともに文書を送付、学会ホームページでも告知)で説明したとおり、第21期機関誌編集委員会は、前期までの委員会から機関誌の改革という課題を引き継いで検討を重ねた結果、『映像学』に国際版『ICONICS』の機能を統合することで誌面を拡充し、冊子版と電子版を刊行する」という基本方針をまとめ、2014年10月4日の理事会に提案して承認されました。作業を進めていくに先立ち、大小幾つかの課題の中で特に会員のニーズに関わると思われる事項について意見を賜りたく、アンケートを実施しました。質問は「1. 外国語論文の使用言語(英独仏か英語のみか)」、「2. ウェブ公開のタイミング(日本語と外国語で時期をずらすかどうか)」、「3. 冊子版の判型(A5かA4か)」の3問でした。2015年2月28日に締め切り、13名の会員の方々から回答を頂きました。回答をお寄せ下さった皆様に謹んでお礼を申し上げます。

アンケートでお尋ねした3点について、回答も参考にして協議した結果、機関誌編集委員会は下記の選択肢が妥当であると判断し、3月20日の合同理事会に提案して承認されました。1. 外国語の使用言語は英語のみとする。2. 日本語の論文と英語の論文の公開時期をずらさずにWEBで同時に公開する。3. 冊子版の判型は現行のA5サイズのままとする。理事会での議論では、1. と2. については会員サービスの低下になるのではないかと懸念する声も出ました。まず、使用言語については従来

の『ICONICS』と同様、英独仏の三か国語に門戸を開くべきだという意見です。しかし、19期の機関誌編集委員会で『ICONICS』の電子版発行を決定した際、「招待論文」と「海外委員」を廃止するという編集体制の重要な変更が同時になされたことはすでにお伝えしているとおりです。つまり、かつての『ICONICS』では編集委員による招待や海外委員の紹介によって論文の水準があらかじめ担保されていたわけですが、現行のように自発的な投稿のみになると、いっそう厳正な査読が求められるようになります。まして、インターネット公開に伴い、従来とは比較にならないほどの広範囲かつ不特定の読者に対して発信するのですから、学術誌としての発行主体の責任はいっそう重くなります。英語だけでも解決を要する課題はいくつもあり、本学会の会員構成を考慮すれば独仏語にまで十分に対応することはきわめて困難です。いちがいに英語以外の諸外国語を排除しようというわけではないのですが、まずは共通語として定着している英語に限定して体制を整えるべきだというのが編集委員会の考えです。また、2. については、インターネットで即時公開すると、機関誌が無料配布される会員の特権を損なうことになるので、少なくとも日本語論文については一定期間公開を遅らせるべきではないか、という意見が出されました。この件について編集委員会は、執筆者の利益を考慮して情報発信の速さを優先すべきであると考えます。冊子版は公的にも私的にも物として所有し、保存して利用できる点に特長があるので、コンテンツの発信の時期が早くてもその刊行の意義が失われることはありません。理事会では、このような協議を経て、最終的に機関誌編集委員会の提案が承認されました。

上述の理事会の決定を受け、機関誌編集委員会は、2016年春に刊行する『映像学』96号から、英語の論文等を受け付け、同時に電子版を発行できるよう、準備を進めていきます。投稿規定を改訂し、編集・査読体制を整備することが大きな課題になります。電子版の発行は、科学技術振興機構(JST)が開発を進めている電子ジャーナル発行用プラットフォーム「J-STAGE Lite(仮称)」(2015年度中に運用開始の予定)を利用する予定です。発行の主体として、図版などの著作権に関わる問題については特に入念に検討していきたいと考えています。

会員の皆様のご理解とご協力を賜りたく、よろしくお申し上げます。

(なかむらひでゆき/機関誌編集委員長、
立教大学現代心理学部映像身体学科)

総務委員会

相内 啓司

総務委員会報告と計画について

本号では第5回理事会・総務委員会(2014年12月13日、早稲田大学・戸山キャンパスにて開催)、および第6回合同理事会・総務委員会(2015年3月20日、日本大学芸術学部・江古田キャンパスにて開催)について併せて報告します。

ここでは当学会においてとくに重要性が高く、速やかに対応を要することとなった2件の案件を中心に報告することとします。まず1件目は今春京都造形芸術大学で開催される「第41回日本映像学会大会」、そして2件目は「本学会財政状況」に関するものです。

1:「第41回日本映像学会大会」について

2015年5月30、31日に京都造形芸術大学で開催される「第41回大会」は伊藤高志大会実行委員長を中心にその準備が着々と進められています。前回の沖縄県立芸術大学で開催された「第40回大会」では研究発表、作品発表の合計が55件でしたが、発表件数だけでなく多様化する内容についても話題になりました。

「第41回大会」では公募に際しては新たに改定された応募申請書(エントリーシート)を採用し、発表の概要をより詳しく記述することが可能となりました。審査に際しては研究企画委員会を中心として組織される予備審査会、そして最終審査を行なう理事会において個々の発表内容の意義や方法、手続きなどの妥当性について審議し、適切な判断を行なうこととしました。

なお、その審査基準は第5回理事会(合同)において以下の3点と定められました。

- ① 約400字の概要が記載されていること。
- ② 映像に関する発表内容であること。
- ③ 学会にふさわしい発表内容であること。

加えて、すでに決められている規定では、研究発表、作品発表の前提条件として当該年度の学会費が納入されていることとされています。

「第41回日本映像学会大会」の応募状況は以下のとおりです。

「研究発表」の部(46件)、「作品発表」の部(14件)

エントリーの集計と予備審査は研究企画委員会が主催する予備審査会が行ない、その結果を得て3月20日に開催された第6回理事会(合同)において審議にかけられました。その結果は以下のとおりです(2015年3月24日現在)。

- A. 採択: 43件
- B. 条件付き採択: 8件
- C. 再審査: 8件
- D. 不採択: 1件

なお、Cについては応募申請書の規定のフォーマットに沿っていないもの、既発表の「研究発表」との差異が不明なものへの問い合わせなどが含まれています。

本件B、C項目については継続審議事項です。

2:「本学会財政状況」に関して

2014年12月になって本学会の財政状況が逼迫し危機的な状況にあるという事実が急浮上しました。当学会は主に会員の年会費を運営予算の原資とするため、学会員が負担すべき年会費の納入率が上がらなければ直ちに運営に支障を来すというリスクを負っています。年度末になって急浮上した財政的な危機とはまさにこのような背景から生じたものです。ここ数年年会費の未納率が高くなる傾向が見られ、学会の運営上大きな問題となっています。

2015年1月末では会費未納の会員数が160名余、未納額がおよそ200万円余にも及び、そのためさまざまな点で困難な状況に直面することになりました。具体的にはその時点で支払期限が迫っていた学会名簿、学会封筒等の印刷費、および学会運営上の経費の支払が一時滞る事態が

生じました。これらの予算運用は会員に還元される事業の一環としてなされるものであり、このような事態に陥ること自体は会員相互の支えによって成り立つ本学会の存続自体を危うくさせるもので、由々しき問題です。

武田会長とともに理事会、総務委員会は早急に解決に向けて具体的な対応を迫られることになりました。その対応策の一つとして会員諸氏に依頼させていただいたのが会費の自動口座振り込みへの登録です。(※領収書の発行が必要というご意見も多く寄せられましたが、領収書の発行について事務局へ請求があれば対応可能です)

また、会費未納の会員には督促状を送付しましたが、こうした経緯によるものです。2015年3月24日の時点では多くの会員の対応がみられ、からくも財政的な危機から緩やかに離脱しつつあります。

しかしながら、未だすべての未収金を回収するにはほど遠い状況に変わりはありません。

総務委員会としてはこのような財政的な困難さを緩和し、また危機的状況を回避するためにこれまでも運営経費のスリム化を図るなどその可能性を検討してきましたが、引き続きこの問題に取り組みます。

一方では今後も研究の活性化を奨励する事業に継続的に取り組み、研究活動助成についても継続したいと考えています。より良い学会運営のために会員諸氏のよりいっそうのご理解とご協力をお願いするものです。

以下に「2014年度第5回理事会(合同)」と「2014年度第6回理事会(合同)」の総務委員会報告として議事録の審議事項を記します(詳細は理事会議事録にある審議事項を参照)。

2014年度第5回理事会(合同)の報告

12月13日(土)、早稲田大学戸山キャンパスにおいて開催。総務委員会からは以下の5項目の議案が提起され審議。理事会においての審議事項は以下の5項目。

- ① 学会ホームページに関する件
- ② 第41回大会に関する件
- ③ 会費徴収方法に関する件
- ④ 新版会員名簿に関する件
- ⑤ 会費納入状況について

2014年度第6回理事会(合同)の報告

3月20日(金)、日本大学芸術学部江古田キャンパスにおいて開催。総務委員会からは以下の3項目の議案が提起され審議。理事会においての審議事項は以下の3項目。

- ① 学会財政状況の件
- ② 第41回大会に関する件
- ③ 学会事務局施設借用と業務委任契約の件

今後の計画

2015年度は以下の項目について検討事項とする予定。総務委員会開催予定は5~6回。

- ① 学会財政状況の立て直しと安定化の検討② 予算案の立案、執行に関する件
- ③ 第41回大会に関する件
- ④ 第42回大会に関する件
- ⑤ 学会ホームページに関する件他

以上

(あいうちけいじ／総務委員長、京都精華大学芸術学部)

研究企画委員会

齊藤 綾子

報告と計画について

研究企画委員会では、第四回研究企画委員会が以下のように開催されました。

日時：2015年3月20日（金）13時半～15時

場所：日本大学芸術学部江古田キャンパス南棟 S303

出席：齊藤綾子、奥野邦利、大田曜、草原真知子、黒岩俊哉、瀧健太郎、村山匡一郎

1) 第41回大会発表予備審査について

A: 研究発表については46件の申込みの内、5件を理事会での審議が必要と内申した。

B: 作品発表については14件の申込みの内、3件を理事会での審議が必要と内申した。

何れも審査基準は2014年12月理事会で決定された以下の3点。

- ・約400字の概要が記載されていること。
- ・映像に関する発表内容であること。
- ・学会にふさわしい発表内容であること。

2) 前期から引き継ぎの課題（研究会活動費助成）について

a: 申請時に予算書（概要）添付することを明示する。（支給金額については調整の可能性がある）

b: 申請書のフォーマットを限定的に公開する。（申請希望者を事前に受け、サンプルを公開する）

・上記2点については、28年度申請に向けて、予算書フォーマットを準備することで対応する。 承認

c: 公募情報をMLで告知する。

・研究会活動費助成についてのML告知は、12月初旬と2月初旬に事務局より情報発信する。 承認

・研究会登録申請についてのML告知は、7月初旬と12月初旬に事務局より情報発信する。 承認

d: 学会報、大会などで報告をする際に「日本映像学会研究活動助成金対象研究」とクレジットに明示する事を義務化する。

・内規に明示する。 承認

e: 助成金の使途に講師料がある場合制限を加えてはどうか。（¥10,000程度。学会の内規：外部講師の上限は¥30,000）

・基本的には¥10,000-を目安とし、謝金（お車代）として受領書を提出すること。 承認

f: 収支決算の提出を徹底する。

・第三回研究企画委員会にて義務化を承認済み。

g: 審査結果及び、審査委員名を学会報で公開する。

・学会議事録で対応する。 承認

3) 今期の研究企画委員会として追加提案された課題について

h: 総務委員会と連携を取りながら、HPの活用を図る

i: 編集委員会と協力し、研究発表の充実を図る

・上記2点については、学会HPの各研究会ページの活用から始める。 承認

(①会報での報告を実績明示、②関連情報とのリンク、③研究会開催予告の充実)

以上

(さいとう あやこ／研究企画委員長、明治学院大学文学部)

支部・研究会だより

東部支部

奥野 邦利

報告と計画について

東部支部では平成26年度に「ドキュメンタリードラマ研究会」が新たに加わり、平成25年度よりスタートした新制度後の登録済み研究会は10を数えます。会報での報告にもあるように、各研究会の活動も活発に行われており、これを足がかりに会員間の情報交換も盛んになっているようです。

研究会申請は春期（4月末）、秋期（9月末）の年2回となっています。東部支部所属で新たなアプローチで研究を進めている会員のみなさんは積極的に申請くださればと思います。

また、年度を跨ぐことにはなりましたが、近いうちに支部講演会も計画していますので、決まりましたら学会HP及びMLでお知らせします。

支部還付金（研究助成費／支部運営費）については、年度末をもって決算しますので、次号会報ではその報告を予定しています。

以上

(おくのくにとし／東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部映画学科)

東部支部

映像テキスト分析研究会報告

中村 秀之

ほぼ4年ぶりに再開した本研究会は、2014年度、下記のとおり2回の研究会を開催しました。

2014年度第1回（通算10回）

2014年4月12日（土）14:00～18:30

立教大学池袋キャンパス1203教室

河野真理江（立教大学大学院）『君の名は』論——「すれ違い」メロドラマの通俗性とマゾヒズムについて

中村秀之（立教大学）「歴史の関を越える——『虎の尾を踏む男達』（1945/1952）の神話・事実・寓意」

2014年度第2回（通算11回）

2014年6月21日（土）15:00～18:30

成城大学3号館1階312教室

小河原あや（成城大学）「ヒッチコック『ロープ』における長廻し移動撮影、映画空間、精神の遍歴——バザン対ロメール&シャプロルの議論を再読する」

木村建哉（成城大学）「神を演じる「同性愛者／全体主義者≒共産主義者」：（対抗）アンチ・クリスト映画としてのヒッチコック『ロープ』」

計画では3回の研究発表会を開催する予定で第3回も準備を進めていたのですが、発表予定者のやむをえない事情により、告知前に開催を取りやめることになりました。予定していた回数を実施することはできなかったものの、開催した2回は、参加者の積極的な質問やコメントのおかげで熱気あふれる研究会になりました。具体的な成果として、本研究会での発表にもとづいて著書の一部や論文として刊行されたものが2点あります。中村秀之会員は4月12日の発表を推敲して、著書『敗者の身ぶり——ポスト占領期の日本映画』（岩波書店、2014年）の第1章第1節に組み込みました。小河原あや会員は6月21日の発表を発展させた論文「ヒッチコック『ロープ』の長廻し移動撮影とショット繋ぎにおける「精神／道徳的」表現——ロメール&シャプロルの議論を導き手に」を『映像学』93号に投稿し、査読を経て掲載されました。研究会での口頭発表が研究者仲間との議論を糧にして著書や論文に発展するという過程は、研究会活動の望ましい姿であり、その意味で、徐々に再開した本研究会はさっそくその目的を果たしていると言っていいでしょう。

来年度も活発な研究会活動を継続したいと思います。ベテラン、若手を問わず、会員各位の積極的な参加を期待します。

(なかむら ひでゆき／映像テキスト分析研究会代表、立教大学現代心理学部映像身体学科)

映像心理学研究会報告

横田 正夫

平成 26 年度の第 2 回映像心理学研究会が、平成 26 年 12 月 21 日（日曜日）に開催された。テーマは『アニメーションの動きのメカニズムに関するパネル討論会』というもので、会場は日本大学文理学部百周年記念館会議室 2 であった。会員を含む 100 名ほどの参加があった。プログラムは、パネル討論会（13:00～17:00）、質疑応答（17:00～17:30）により構成された。

研究会開催において告知に使用されたパネル討論要旨は以下のようなものであった。

2013 年にアニメーション映画監督片淵須直氏が提唱した「アニメーションの動きについて言語化・法則化して、創作現場と研究の両方の立場で概念を共有したい」という重要なテーマに対し、映像心理学研究会において、アニメーション制作現場と研究側の間で意見交換が数次に渡って繰り返されている。その結果、日本と海外のアニメーションの動きの作り方を、「リミテッドアニメーション対フルアニメーション」という古典的ではあるが皮相的な二分法によらず、それぞれが作る代表的な動きを受容する生理学的メカニズムによって区別することで、それらの違いがより理解しやすくなるのではないかと考えられるようになってきた。そこで今回の研究会では、パネルディスカッション形式を取り、代表的なアニメーターとして豊富な経験を有する井上俊之、稲村武史両作画監督を招き、「表現の現場で実際に動きを作っている人たちが、背景にどのような感覚を置いた動きを作り出し、どのような経験則を蓄積しているのか」について語ってもらい、それを法政大学吉村浩一氏ら知覚研究者などからの見解とすり合わせることで、このテーマに関する今後の展開の礎としたい。

上記の内容を討論するためにパネラーとしてアニメーション業界他から豪華なメンバーが集まった。このメンバーの豪華さが、参加者が多かった理由である。パネラーは、アニメーション業界から井上俊之（アニメーター）、稲村武志（スタジオジブリ 作画監督）、片淵須直（アニメーション映画監督）、深井利行（ブレインズ・ベース 元アニメーター養成担当、アニメミライヒアリング委員）、そして研究者の立場から吉村浩一（法政大学 知覚心理学者）の計 5 名であった。そして司会は横田正夫（日本大学文理学部 映像心理学者）であった。

まずは片淵会員がこれまでの研究会で扱ってきた内容についての総括

を行った。もともとはアニメーションに関する言葉の定義を意図していたのであるが、その定義を心理学的に行おうとすると必ずしも十分ではないことが示唆された。まずは現実のアニメーション制作が 3 コマ打ちで行われるのが状態であり、同じ 3 コマ打ちでありながらジブリ作品はフルアニメ、エヴァンゲリオンはリミテッドと言われてしまうような現実があり、フルとリミテッドの用語が、本来技法から来たものであるはずが、内容に依存した使われかたをしていると述べる。「マイマイ新子と千年の魔法」も 3 コマ打ちなのだが、これはフルアニメとみなされる。現実には 3 コマ打ちと 1 コマ打ちがひとつの作品の中に共存することがあり、その例として「アルプスの少女ハイジ」が取り上げられた。印象的には 1 コマ打ちになると動きが「ヌルヌル」した感じになる。どうもこのヌルヌル感とはめどなく動いているものについて印象付けられるものらしい。

さてアニメーターの井上氏は、現場からの貴重な提言を行った。彼の携わった日本アニメ（一ター）見本市の「西荻窪駅徒歩 20 分 2 LDK 敷礼 2 ヶ月ペット不可」（前田真宏監督）について触れ、7 コマ打ちといったような作画をしているがアニメーションとしてみるとそれでも成立しているという事実を示す。さらには「悪の華」について作画例が紹介され、もとになる実写映像を手掛かりにアニメーション化されているため、オリジナルの実写映像で、パレーボールのボールを撥ね飛ばす腕の当たりのコマがないまま作画されているのに、知覚的にはボールが腕に当たって弾き返されたように見える。アニメーターとしては、やはり腕にボールが当たって弾き返されるコマは入れたい。あるいは鼻くそをほじるような場面のアニメーションを考えると指の動きは鼻の穴をめがけてゆき、鼻をほじくるといったようになるが、現実場面の観察では意外に早い動作で済んでいる。稲村氏も同様にアニメーターらしく、歩きのアニメーションについて、新しい工夫を述べていた。こうしたアニメーターからの提言は、非常に興味深いものがあり、その後深井氏や吉村氏からの提言もあったが、より総合的に動きの理解を深めるためには、上記の提言の問題を、より科学的な俎上で検討する必要があるだろう。

今後の研究会についても述べておきたい。平成 27 年度の研究会は 2 回行いたいと考えている。

以上

（よこた まさお／映像心理学研究会代表、日本大学文理学部）

Image Arts and Sciences 170 (2015) , 7

東部支部

ビデオアート研究会

瀧 健太郎

< 報告 >

本研究会は、ビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足。第11回と第12回のビデオアート研究会では、引き続きビデオアートのメディアム性を明るみにする70年代のゲリラ・テレビジョンに関する文献研究と、制作現場や展覧会などの現在性について調査するフィールドワークを行った。各回の詳細の報告は下記の通り。

第11回ビデオアート研究会

日時：2015年1月30日（金）19:00-21:00

会場：co-lab 渋谷アトリエ 2F 会議室3

内容：David Joselit “TALE of Tape: Radical Software” 講読 ゲリラテレビジョンなどの動向について

パネリスト：

齋藤理恵（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）

進行：瀧健太郎（ビデオアートセンター東京代表）



齋藤理恵会員によるテキストの解説分析が発表された

第12回ビデオアート研究会

日時：2015年2月27日（金）19:00-20:30

会場：TAV ギャラリー、阿佐ヶ谷南2丁目パーキング、JR中央線高架下ほか「ビデオアート・プロムナード」会場8箇所



山本圭吾「Hand no.2」(1976) 屋外展示の様子
(ビデオアート・プロムナード in 阿佐ヶ谷展 写真：堀裕輝)

内容：「ビデオアート・プロムナード in 阿佐ヶ谷」都市邂逅型のビデオ展視察

当日開催されていた阿佐ヶ谷の街中を使ったビデオアート展の会場とその舞台裏、参加アーティストによるビデオアート展示会場にてその制作過程について話を伺った。

参考リンク：<http://www.vctokyo.org/jp/2015/01/videoartpromenade-2015asayga.html>

パネリスト：

河合政之氏（ビデオアーティスト、東京造形大学・東北芸術工科大学非常勤講師）、中嶋興氏（ビデオアーティスト）、西山修平氏（ビデオアーティスト）、浜崎亮太氏（ビデオアーティスト）

進行：瀧健太郎（ビデオアートセンター東京代表）



展示会場にてアーティストによる制作・作品解説が行われた

今後の計画について

今後も定期的にビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形で研究会を進めてゆく。研究内容は随時参加メンバー内で話し合う。12回までの成果報告として研究会参加者による、論考または冊子の編纂も進行中。

*ビデオアート研究会はメンバーリストで研究会の情報や資料などを共有しております。研究会参加ご希望の方は、瀧までまでご一報ください。

（たき けんたろう／ビデオアート研究会代表、
ビデオアートセンター東京）

アニメーション研究会報告

横田 正夫

平成26年度の第2回アニメーション研究会は、平成27年3月29日(日)の3:00～5:50まで、日本大学文理学部本館3階H305教室で開催予定である。

プログラムは2つの話題提供から成り立っている。まずは3:00～4:00の間に、「視覚的な運動による素材感」との題で増田知尋・和田有史(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所)に発表をお願いした。発表要旨は

われわれは視覚的な運動から、対象のかたさや弾力性など素材に関する性質を知覚することができる。本講演では、このような素材感を生じさせる動的な視覚的要因について、運動対象が静止対象に刺さる貫入運動の加速度や、主観的輪郭の誘導図形の振り子運動を体系的に操作した心理学実験を中心に紹介する。一連の実験により、貫入運動では運動対象の加速度変化により静止対象の“かたさ”判断が系統的に変化すること、また、主観的な面を生じさせる誘導図形の一部を振り子運動させたときの振り子間の時間差(位相差)の程度により主観的な面の素材感を伴う運動印象が変化することや、振り子運動の減衰や加減速により面の粘性や弾力性判断が変化することが示された。これらの結果と、材質と対象の変形に関する物理的な記述とを比較し、素材に関する知覚の特徴について検討する。

というものである。この後4:00～4:20の間に質疑応答が行われる。

2題目の話題は、4:30～5:30の間に、「アニメーションの動きについて」との題で、竹内孝次(アニメーション・プロデューサー)に発表をお願いした。発表要旨は

私は今回、成果物としての「原画」を、改めて言葉で定義することから始め、日本のアニメーション業界は「動き」というものを求めるのか求めないのか。そもそも日本のアニメで使われる「動き」とはなんなのかを考えてみたい。

その上で「アニメーション・プートキャンプ」で行って来た実験的教育を経て感じた、「表現するアニメーションを覚えるためには身体を動かす必要がある」という実感をみなさんに伝えたいと思います。

今まで気にかけて来た単語として「ミラーニューロン」がありました。そこに今回新たに「体を操る運動上達の3つの鍵」という朝日新聞の記事を目にし、このあたりは学のみなさんと意見交換をたく思っています。

というものである。5:30～5:50に質疑応答が行われる。

平成27年度においても研究会を2回開催する予定である。

以上

(よこた まさお/映像心理学研究会代表、日本大学文理学部)

ドキュメンタリードラマ研究会

杉田 このみ

報告と計画について

本研究会は下記のとおり第1回研究会を開催した。

日時 2015年3月15日(日)13時30分～16時50分
会場 明治大学 駿河台キャンパス グローバルフロント3階403N教室
後援 明治大学サービス創新研究所
内容 発足記念特別講演「ドキュメンタリードラマの可能性」
講演者 今野勉氏

1975年、日本テレビで放送されたテレビ番組『太平洋戦争秘話・欧州から愛をこめて』を上映・鑑賞後、演出を担当された今野勉氏(テレビマンユニオン非常勤取締役・最高顧問)による講演、参加者とのディスカッションを行った。

『太平洋戦争秘話・欧州から愛をこめて』について
正式番組名『木曜スペシャル 太平洋戦争秘話～欧州から愛をこめて～緊急暗号電「祖国ヨ和平セヨ!」』放送日1975年12月18日 74分
演出・今野勉 制作・萩元晴彦ほか 企画 小谷正一 原作・大森実「戦後秘史」
出演 仲代達矢 伊丹十三 ほか(放送ライブラリー番組検索から引用)

番組概要

太平洋戦争末期にスイスで必死の秘密和平工作をつづけていた1人の海軍武官(藤村)がいた。戦争という巨大な流れ、大きく狂い始めた運命の歯車を押しとどめようとした武官の孤独な戦いのドラマ。海軍武官・藤村を仲代達矢、伊丹十三がレポーターとしてドラマを実況中継風に伝える。証言者も登場し、仲代が直接話しかけたり、伊丹がインタビューをしたりする。ドキュメンタリードラマの代表として本作はいまも語り継がれており、研究会としても第1回に最もふさわしい番組である。

今野勉氏 プロフィール

演出家・脚本家。1936年秋田県生まれ。北海道夕張市育ち。1959年ラジオ東京(現・東京放送)入社。1970年に仲間とテレビマンユニオン創立。旅番組『遠くへ行きたい』、3時間ドラマ『海は甦る』などを演出。元・武蔵野美術大学映像学科教授。現在、テレビマンユニオン非常勤取締役 最高顧問。一般社団法人「放送人の会」会長。

今野勉氏 講演



1. 番組制作のきっかけ

原作はノンフィクション作家・大森実「戦後秘史」。発表される前の原稿を、小谷正一さんが「これテレビにならないか」と持ってきた。ある朝、会社に行ったら僕の机の上に分厚い原稿用紙が置いてあって、萩

元晴彦が「小谷さんが持ってきたけど、ちょっと読んでくれない？」って。目を通したら、戦争はどうして終わったか、それを集めた原稿だった。そのなかで僕は、終戦間際の和平工作の話がすごく面白いと思った。ただ場所がベルリンだったり、ベルンだったりするので、そのままセットつくってたら、とてもじゃないけどできない。

どうしたらいいかと考えて、現地へ行ってその場で出来事を再現すると。しかし、どんなに俳優が演技を上手にやっても「ドラマ」になってしまい、臨場感に欠ける。そこで考えたのが、伊丹十三さんを中継役にしよう。実況中継はテレビのなじみで、特有の方法。伊丹さんは『遠くへ行きたい』とか『天皇の世紀』と一緒にやっていて、自分のものにしてから話すので、現場で臨場感あふれる話し方ができるとよくわかっている。伊丹さんにやってもらえば成立するかもしれないと思った。予算を少なくして、この素材をどう番組にするか、と考えたので、僕は最初「ドキュメンタリードラマ」という言葉を知らなかったんですよ。

2. 海外でのビデオ収録を可能にした技術革新

当時のスタジオカメラは大きくて、海外には持って行けない。それまで海外ロケは全部フィルムだった。僕は「絶対フィルムで撮ったらダメだ」と考えていた。実況中継風というのは、テレビ画像でしかそのリアリティは表せないと思っていた。普通の人はフィルムでもビデオでも変わらないと思っているけど、実は、フィルムはテレビカメラよりも解像度がいいときもある。今はそんなことないかもしれないけど、16mmは、つねにフレームが細かく上下している。そういうのは実況中継ではない、最初から「フィクションだ」って感じになる。実況中継風に「いままさにそこで行われている」という感じを出すにはビデオカメラを持って行くしかない。

そのころ池上(池上通信機株式会社)が、たまたまハンディカムの試作機ができたばかりで、テレビマンユニオンに「これを現場で使ってみてどういうところに欠点があるか、試してほしい」と持って来た。たとえばグリップとか、ビューアーの位置とか、肩に乗る位置とか、重心とか。そういうのはカメラマンが使ってみないとわからない。そのデータをくればタダでつかっていいと。それがひとつしかなかったんですよ。世界に一台しかないカメラを持って行ったわけです。現地で故障しても代替機がない。それを決意するのが大変だった。ビデオエンジニアとは別にメーカーの人にもロケに着いて来てもらった。

それからカメラは小さくなったけど、ビデオテープは2インチのままだった。幅が5cmくらいある。VTR車だけでバス一台、みたいな。そのころ外でビデオ収録するときは、カメラを積んだ中継車とテープ録画するVTR車、それに電源を送る電源車と、3台トラックがないとできなかった。それが小さいカメラと、トランクくらいの録画機ができて、ギリギリ海外に行けると。2インチのテープは一本20分しかない。番組の1時間分はロケとすると、5倍から安全のためには10倍分のテープを持って行く。2インチテープがすごい量になる。それを動かすバッテリーをとめてたくさん持って行く必要がある。それらを全部合わせると1tになった。1tを海外に送るってすごく倍なお金がかかる。それから猛然と技術陣が頑張っ、ケーブルを細いものに変えて、テープをどうやったのか僕は知らないけど、20分が40分回るようにした。だからテープが半分になった。いずれにしる全部で300kgになり、3分の1に減らすことができた。それで海外での実況風の映像が確保できることになった。そういう技術的なバックアップがあって可能になり、カメラもなんとか一月壊れなくて実現できた。これだけの海外ロケができたとは局の技術陣には大ショックだった。他局から「あれはどうやったんですか」と、ひそかに電話がかかってきましたよ(笑)。技術史上でもこの番組は記念すべきものになった。

3. 演出について：ドキュメンタリードラマの瞬間

この番組がリアルに見えるのは、ふたつことがある。ひとつは、はじめから計算してある状況をつくってしまう。たとえば、仲代さんが役として、証言者(津山氏：実際に藤村と働いていた人物)に話しかけるところがありますね。あれは津山さんが出演してくれるので、藤村の言葉をそのまま仲代さんが言う、それで津山さんが答えるという状況をつくった。ただし、演出家として設定したのはそこまでで、津山さんがどう答えるかというのは一切知らない。それは本人の自由。どういう偶然になるかわからない。そのことで生まれるリアリティがある。どういふふう近づいていくか、カメラもわからないから、カメラが揺れている。またその揺れがリアルが呼び込む。状況をつくっても、計算できない部分を随所に残していること。

もうひとつは、現場で発見したとき、それを素早く映像にする。よく話題になるのは、クラマーという四分の一ユダヤ人の女性を連れて逃げる話がある。そのクラマーを演じる女優さんが、たまたまユダヤ人だった。僕はそれを前日に聞かされて、「彼女は現在生きているユダヤ人として、どういう思いで、どういう風にこの役を演じているんだろう、それをする方法はないか」と考えた。クラマーになりきっていなから、自分がユダヤ人として考えて答えるというために、役のまま、自由にインタビューに答えてもらおうと。クラマーという女性も、その女優も実在のもの、その両方を一挙に捕まえる方法として、インタビューしよう。伊丹さんも英語ができるから、あのシーンは生まれた。突然思いついたので、番組の中で女優がユダヤ人と明かしてないんだよね。それをどこかで明かすべきだったなと今は思います。あのような偶然を素早く見つけて、素早く撮る、そういうのがたくさん入り交じっている。ドキュメンタリードラマという具体的な方法があるのではなく、仕込んでかつ自由。そのときではないと発見できない偶然によって、その偶然を見逃さないというアンテナをはっておく。実在の人を演じる女優さんがいて生まれる現実。融合して分からない、現実と虚構が出会う瞬間に生まれるものというのが、僕としてはそれがドキュメンタリードラマの一番面白い瞬間だと思う。

4. ドキュメンタリードラマの可能性

今回「ドキュメンタリードラマの可能性」という講演タイトルにしていますが、言葉を変えると「テレビの可能性」なんですね。限られた方法があるのではなく、その都度その都度、その素材にどう向き合うか、と考えることがすでにテレビ的。あまり「ドキュメンタリードラマとは何か」、と定義づけるとかえって、自由さを失うおそれもある。それで常に「可能性」と、つねに「未完成」「自由さ」を持っていた方がいい、というのが僕の気持ち。

事実に基づいたドラマは、ときどきドキュメンタリードラマと言われるけど、それは大きな意味でドラマだと思います。あと、ドラマとドキュメンタリーが交互に出て来るというのもある。交互に出て来るだけで、ドキュメンタリードラマと言わない気がする。悪いと言っているのではなく、僕は自分ではそれは言わないかな。その場面ではしか表せないもの、虚構と現実がぶつかって融合して生まれるものと思っています。

たとえば、ハック博士を演じた俳優が、本人にそっくりなんですよ。ハック博士本人と会ったことがある酒井さんという方も、俳優に会ったとき笑ったくらい。実在した人を何十年後にそっくりな人が演じるというのは、それだけで、何だろうなあ、あそこで生まれるあれを何と言うのかな。僕も当然似た人を探しますけど。証言者に、似た人を会わせたからその笑いは生まれるんですけど、それを考えると面白い。「本人に似てる」と笑う、ということで、「本当にいた人なんだ」というリアリティを生むという効果があったのかもしれないですね。すごく似てると思うと、証言者にどうやって会わせて、どう反応撮ろうか考えた

んですよね。それは計算ですよね。そういう小さなことがいくつも重なっている。

再現ドラマって最近多いですね。「あれどこで撮ったの?」と聞いたら「再現して全部つくった」って。でも聞こえてくるのは、「なんか嘘っぽい」。わかりやすいんだけど、なんか嘘っぽい。なんかリアリティに欠ける。なぜだろう。これはみなさんに聞きたい。起こったことをセットもセリフも含めてすべて精密に事実の通りにやるっていうのは、ドキュメンタリードラマとは違う。再現と、ドキュメンタリードラマどう違うのか。現場では具体的に言われはじめています。

この番組も、「これはフィクションだ」と、何度も見せているけど、リアリティを失っていない精神がある。それは何か。たとえば、原爆が落ちてしまう、というシーンのあと、突然、撤収作業をしているスタッフたちが映る。あれもたぶん脚本に書いてなかったと思う。僕がそれを要求した。なぜそう考えたかという、この番組の「この和平工作がうまくいってれば、あの二発の原爆は落ちなかったのに」という思いは、つくっているわれわれが一番感じている。それを一切描かずに、歴史の運命と一緒に受け取るという気持ちを示さなくて、特権的にカメラのこっち側にいて、見ている人だけに預けるとするのは、責任もとらない、あそこでわれわれの気持ちを出さないのは逃げだと思っただけですね。だからここに映らうって。でも個々がどう思っているかはわからない。ただ黙々と片付ける。それはいまやっているのは無駄かもしれないという気持ちも含めてね。だって原爆は落ちてしまった。最終的に使うかどうかは見て決めよう。スタッフが出るって難しいからね。何回も見ているけど、あのシーンに違和感はない。リアリティはないはずなんです。個人個人思いが違うから。でも一言も言わないってことで協力してもらった。最終的に伊丹さんのアップになり、背景に映る太陽で真っ白になり、それは原爆と重なるというのは、あれも苦勞もした。現場でそれが成立しているかどうか、現場でディレクターが判断するのが一番難しい。でも「成立」ってなんだっていうね(笑)。ここから先はディレクターの人間としての一種の感性だね。再現が嘘っぽいかという何が成立していないんだろうな。再現して演ずるということがあるけど、なんか違和感がある。どんなに上手く演じても演じているだけだとダメ。伊丹さんがレポーター役を演じていたらダメ。あの人は自分の言葉を言いたくて言っている。そこが成立しているかどうか重要なことだと思う。同じことをうまく言ってもダメだと思う。ドキュメンタリードラマのドキュメンタリーとは、どこにあるか。本当らしい言葉を使うだけではダメなんだろうと思う。脚本に書いてあっても、自分の言葉として話す。現場でそれを繰り返し繰り返しやってた。でもそれは当たり前だから、特別なことをやっているという意識はなかったです。

その後、フロアから積極的に質疑があり、活発な議論の場となった。

今後の研究会では、第41回全国大会で研究発表を行い、7月か9月に第2回研究会を開催する予定である。第2回では、研究会メンバーのそれぞれの関心から発表し、議論を深める。またその後の研究会でも、制作者を招き、作品上映とディスカッションの場をつくっていききたい。

最後に、今野勉氏と、ご後援いただいた明治大学サービス創新研究所長阪井和男教授に感謝申し上げます。

以上

(すぎた このみ/ドキュメンタリードラマ研究会代表、千葉商科大学)

アナログメディア研究会

西村 智弘

報告と計画について

【活動報告】

●映像+実験映画祭

3月18日、「阿佐ヶ谷アートストリート」(阿佐ヶ谷の各地で行われた総合的なイベント)のなかで「映像+実験映画祭」(アート・アニメーションのちいさな学校・地下劇場)が行われ、アナログメディア研究会が協力した。「第一部:美術と映像」「第二部:実験映画」という二部構成のプログラムであり、第二部を太田曜がキュレーションし、映写などを手伝った。第二部の上映作品はすべて16mmフィルムで、太田曜「REFLEX/REFLECTION」(2009)、西村智弘「青い歩道橋」(2003)、能登勝「下弦の月」(2006)、末岡一郎「AURORA」(2013)、水由章「水光色」(2002)、宮崎淳「FRONTIER」(2003)であった。
<http://www.asagayaartstreet.com/#!EVENT-映像+実験映画祭/cmzo/D469FBED-4908-488D-8CE5-D57AB6284D5C>

●アナログメディア・カンファレンス2015 [1895-2015 フィルムの現在(いま)]

Analogue Media Conference 2015
アナログメディア・カンファレンス2015



奥山順市作品「まぼろし」

【1895-2015 フィルムの現在(いま)】

● 8ミリフィルム新作集「グッバイ、ラボ。」	● 8ミリフィルム新作集「18-exclamation8スペシャル」
● 奥山順市作品集「フィルム三銃」Aプログラム	● シンポジウム「フィルムの現在」-映画フィルムの発掘と制作について-
● 奥山順市作品集「フィルム三銃」Bプログラム	● 16ミリフィルム新作集「FILM as FILM」
● 高田「映画にとって奥山順市とは何か?」	● 対談「アナログメディアの可能性」金子達・西村智弘
○ 山崎(のりあ) 実験映画「Experimental Projection」	(特別上映) ベーナー・ケルソ「Dichtung und Wahrheit」(佐藤和弘)

3.21(土) 22(日)
会場: 阿佐ヶ谷美術専門学校 422・423教室
最寄駅: 有明線 新高円寺駅 徒歩5分

主催: 日本映像学会 アナログメディア研究会
www.facebook.com/analogmedia
analogmedia2015@gmail.com
協賛: 阿佐ヶ谷美術専門学校

料金: 1000円/1プログラム (学生500円)
2000円/フリーパス (学生1000円)

3月21日(土)と22日(日)の両日、阿佐ヶ谷美術専門学校の422・423教室にて、「アナログメディア・カンファレンス2015」を主催した。映画作家、批評家、研究者、アーキビストらに参加し、作品の上映とともにシンポジウムや対談などを行った。映画生誕120周年に当たり、映画メディア(フィルム)の現在を多角的に検証するイベントである。アナログメディア研究会が行ったイベントとしては最大のものとなった。
<https://ja-jp.facebook.com/analogmedia>

■3月21日(土)

●8ミリフィルム新作集「グッバイ、ラボ。」

2013年9月にフジフィルムの8ミリフィルム現象サービス終了することをきっかけに、福岡発の作家集団「フィルム・メーカーズ・フィールド」、関西の「メタ・フィルム・マーヴェラス」の呼びかけで集まった短編をセレクションしたプログラム。すべて8ミリ映画による作品で、東京初上映となる。

上映作品: 黒岩俊哉「Ma-no-Me」、堀内孝寿「RINKAI」、中原千代子「Sans Suite」、香月泰臣「夜を狩る」、山本幸「RE-MIX」、宮田靖子「ひかりぬけて」、萩原貴之「つながる」、大橋勝「随に」、堀内孝寿「LOST」、山本幸「2014・11・15 関西上映のための作品」、黄木可也子「ぼろ」、宮田靖子「海月」、川口肇「wired-glass」、能登勝「2001-1979」、岡田彩希子「不眠」、平田正

孝「午睡のあとで」、黄木優寿「くもわたるふねひとつ」

●奥山順市「フィルム三昧」

1960年代からフィルムの仕組みをテーマにした作品の制作を続ける奥山順市の作品を二つのプログラムによって特集した。過去作品の上映とともに、新作のライブパフォーマンスが二つ発表された。

Aプログラム：「Outrage (手ごめ)」(1970)、「No Perforations」(1971)、「Frameless 16」(1971)、「紙映画」(1972)、「我が映画旋律 (My Movie Melodies)」(1980)、「MOVIE WATCHING」(1982)、「浸透画」(1994)、「INGAの世界」(1994)、「時の流れに乗せて」(1997)、「サンドイッチ」(1988)

Bプログラム：「Sync pic あっ！画を見てから音が聴こえる」(2001)、「現像処方 Dev-18」(2005)、「まざるな」(2008)、「エマルジョン・ペインター」(2009)、「つなぎ目」(2011)、「透かしてみれば」(2013)、「皮のフィルム」「未現ゾーン・浸蝕」(いずれも2015、新作ライブパフォーマンス)

●鼎談「映画にとって奥山順市とは何か?」

奥山順市×南俊輔×太田曜 (司会)

オープニングとして南俊輔のフィルムパフォーマンス「Experimental Projection」を上演し、そのあとに奥山順市の作品をめぐる三人の鼎談が行われた。フィルムでつくることの意味やアナログメディアとデジタルメディアの違いなどが議論された。

■3月22日(日)

●8ミリフィルム新作集「!8-exclamation8 スペシャル」

石川亮ら若手作家を中心とした8ミリフィルムの自主上映企画「!8-exclamation8 (エクスクラメーション・エイト)」による新作プログラム。上映作品：小畑円香「ただ、まぶしい」、宮本尚昭・山ミヤエ「あす、満ち欠ける」、白石義行「一瞬の夢」、ムラカミヒロキ「8 milli-on」、清成晋太郎「新しい夜」、バクユンボン「Park park」、小野由姫「部分」としての美、「動き」としての美。、新宅謙吾「Park 4 Nicole」、石川亮「GLOW II」

●シンポジウム「フィルムの現在 ～映画フィルムの供給と制作について～」
石川亮×マディ折原×末岡一郎 (司会)

フィルムが衰退に向うなかで、フィルム環境の現在を考えるシンポジウム。フィルム状況に詳しいマディ折原が海外を中心としたフィルムの現状を、映像作家の石川亮が8ミリフィルムによる自主上映活動を報告した。

●16ミリフィルム新作集「FILM as FILM」

上映作品：宮崎淳「心霊映画」(2005)、能登勝「夢代八」(2014)、水由章「BEYOND CONTROL」(2014)、末岡一郎「кинофрагмент」(2014)、太田曜「L'Image de la Pucelle 2」(2013)、川口肇「formosa-blue」(2015)、大島慶太郎「Liquid Particle」(2002)、徳永彩加「光る女」(2015)、伊藤隆介「悪魔との契約」(2013)、谷岡昭宏「ミートボールブーン」(2015)

●対談「アナログメディアの可能性」

金子遊×西村智弘

映像作家、批評家である金子遊をゲストに迎え、西村智弘と対談を行った。日本初公開となるペーター・ケーベルカの「Dichtung und Wahrheit」(1996-2003)をフィルムで上映した。ケーベルカの作品に対する考察、アナログメディアの意味やアナログとデジタルの関係などの議論が行われた。

●谷岡昭宏「フレームの中の動物たち」

8mm ループなどによるフィルム・インスタレーションを期間中に展示した。

プログラムの担当者は、「グッパイ、ラボ。」が川口肇、奥山順市の上映と鼎談、および「FILM as FILM」が太田曜、「!8-exclamation8 スペシャル」が石川亮、「フィルムの現在」が末岡一郎、「アナログメディアの可能性」が西村智弘であり、当日の司会進行を水由章が務めた。来場者には資料にもなる詳細なプログラムが配布された。また、二日目の対談のあと懇親会を行った。

【活動計画】

- ①日本映像学会京都大会での作品上映 (調整中)
 - ②「アナログメディア研究会北海道地域映像表現カンファレンス (仮)」
 - ③「アナログメディア・カンファレンス2016」の開催
 - ④「ヨーロッパの実験映画」の上映
- その他、「武蔵野はらっぱ祭り」映像+実験映画祭(阿佐ヶ谷アートストリート)「小田原ビエンナーレ2015」に協力する予定。

(にしむら ともひろ/アナログメディア研究会代表)

映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

「映像表現研究会」報告と計画について

昨年の10月末に東京、11月末に京都で<インターリンク学生映像作品展：ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2014 > (第8回)が開催されたことは、前の会報で報告しましたが、今後、参加22校の代表作の中から各校の推薦教員による投票によって優秀作品を選抜(「学生選抜作品集DVD」の作成)します。次期全国大会(京都造形芸術大学)において、この選抜作品集を上映するとともに、研究会を行う予定です。

<東部会>

現在、東部会では学生選抜作品集を作成するための準備を進めています。参加各校からの許可をもって、動画共有サイトYouTubeへの作品アップロードを行い、推薦教員の互選によって数作品が選抜されます。

また「ISMIE2013」と検索していただければ、以前の参加作品もご覧いただけますので、お時間の許す範囲でご覧ください。映像制作の新たな状況が垣間見えると思います。

(奥野邦利)

<西部会>

「ISMIE2014」(京都會場)に対する研究会活動助成金の収支内容について、以下のように報告致します。

<収入>	¥80,000 : 助成金

<支出>	
10 / 25	¥10,810 : ポスター兼チラシ印刷代
11 / 5	¥6,000 : 大判プリント代 (会場ポスター用)
10/31+11/6	¥2,360 : 郵便代金 (チラシ郵送)
11 / 27	¥200 : 駐車代金 (搬入時)
12 / 4	¥37,800 : 会場使用料
12 / 22	¥980 : 宅配代金 (HDD+DVD 返却)
1 / 6 (2015年)	¥22,000 : デザイン制作費

支出合計	¥80,150

(伊奈新祐)

以上

(おくのくにとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)
(いなしんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)

「1950 年代日本の年少観客の映画受容をめぐる出版メディア文化との比較——「教育」と「消費」のあいだで」報告

渡邊 大輔

本発表では、発表者が 2014 年度から取り組んでいる科学研究費補助金研究課題である「戦後日本映画における児童観客の実態調査」(若手研究 B、研究課題番号: 26870620) の調査研究成果の一部として、1950 年代前後の日本の年少(子ども)観客の映画受容の場における、映画と年少児童向けの周辺メディア文化との影響関係についていくつかの論点に分けて報告した。とりわけ本発表でその分析素材として注目したのは、戦後の児童文化を代表する「マンガ」や「絵物語」などの出版メディアであり、主にそれらの内容や表象を検討した。また、その中から抽出される具体的な論点としては、第一に、年少の観客たちを低劣な文化から隔離すると同時に適切に善導していく「教育」からの視点や実践であり、また第二に、当時、映画とともに新たな新興メディアとして注目を集めていたラジオなどとの間メディア的な関係性である。

分析のための資料は、1) 当時の種々の文献(映画雑誌、教育雑誌など)に掲載された、映画館調査を中心とする資料、及び 2) 50 年代前後の「映画」に関連する児童向けの出版物(児童向けマンガ雑誌、単行本、絵物語、絵本など)を用いた。また、ここには、発表者が 2014 年 8 月末に調査した京都国際マンガミュージアム、大阪国際児童文学館所蔵の資料、及び国立国会図書館、国際子ども図書館所蔵のマンガ・映画関連資料が含まれている。

まず、50 年代前後における年少観客の映画受容の統計的実態を、当時、実施されていた映画観客調査の文献記事に基づいて整理した(この点については、拙論「観客の時代」の子ども——1950 年代日本映画における年少観客の受容動向と観客調査、『演劇研究』第 38 号を参照)。その結果、当時の年少の映画観客の割合が観客全体のおおよそ数%であったことを示した。さらに、同様の観客アンケート調査を参照し、年少観客の映画に対する嗜好を年齢別、男女別ごとに概略的に整理した。

そのうえで、当時の年少観客と映画の関わりを考えるうえで重要である、「映画教室運動」などと呼ばれる一般的な劇場興行とは異なる「非劇場型」の映画受容の場を紹介した。映画教室運動とは、戦後直後から 50 年代初頭にかけて、全国の学校で展開されていた映画教育運動の一つであり、ここに「教育」という契機が介入してくるのである。

以上を前提として、続いて、こうした児童の映画受容と同時代の出版メディア文化との関わりについて報告した。

上記の出版メディアとは、先述のごとく、具体的には「(ストーリー)漫画」「絵物語」「写真物語」といった人気分野だが、まず、「映画」と「マンガ」との歴史的な関わりについて、マンガ史の知見も踏まえて明治期の本多錦吉郎「藪をつついて大蛇をせしめ」(『驥尾団子』)から経緯を整理した。そのうえで、「人気映画ジャンルのマンガ化」「漫画映画のマンガ化」などの主題ごとに分類し、当時のマンガ雑誌や単行本で発表された映画関連のマンガ作品のモチーフや表象の特徴を分析紹介した。

さらに、今回の調査の過程で見出した興味深い資料として、「映画」というメディアの形式的特性を自覚的に反映させる表現を伴ったマンガ作品の存在であった。例えば、1948 年に青井昌子が描いた赤本マンガ『ラッキーマサちゃん撮影所大暴れ』は、主人公は映画製作の現場である撮影所を舞台に活躍するアクションものだが、このマンガの作画表現自体が当時のマンガにもすでに見られたように、映画のスタッフロールなどを模した表現が取り入れられており、当時の児童の映画とマンガとの間メディア的な感性や認識を窺い知る資料となっている。また、その点は 1950 年の倉山章介『野球漫画映画ブック ベンチくん』においてさらに顕著に顕れている。この作品は冒頭において、主人公のベンチくんの物語が、それを映画として映画館のスクリーンで鑑賞する子どもたちの様子とともに示されるという多層的な構造をとっている。16 頁の短編漫画だが、漫画、映画、写真、ラジオ、電話……と間メディア的な入れ子構造や仕掛けに満ちた作品である。

また、以上のような出版メディア文化と同時代の放送メディア(ラジオ及びテレビ)との児童文化におけるメディア的関わりについても瞥見した。この点では、例えば当時、『高丸・菊丸』などの子どもに人気であったラジオドラマが積極的に映画化や連載マンガ化の題材になっていたことが窺われた。

以上の報告から、戦後、1950 年代にいたる日本の年少(子ども)映画観客は、その映画市場における主要な観客層を取って代わられつつも、一定の固有の嗜好を示し、また、映画教室運動などによる教育への包摂を含め、独自の受容形態を形成していたことが明らかになった。そこでは、年少映画観客と出版メディア文化との関係も、子どもたちに人気のあるジャンルや映画のマンガ化など、相互につながりがあった。また、映画の受容経験をメタ物語的に取り入れた児童マンガ作品も描かれていた。ここには、当時の児童たちが映画、マンガという複数の異なるメディア経験を往還しながら享受していたことが窺われる。また、そうした出版メディアと映画との関わりは、さらにその両者とも、当時の新たな放送メディアであるラジオ、そして 60 年代以降に本格的に普及していくテレビとも相乗的な関係を形成していた。戦後の年少映画観客の映画の受容動向は、こうした多様なメディア経験のネットワークを総体的に把握することが欠かせないだろう。

今後の課題としては、明治大学現代マンガ図書館、杉並区アニメーションミュージアムなどの関連施設の調査を継続して行っていきたい。さらに、戦後の視覚教育雑誌『視覚教育』、放送教育雑誌『放送教育』などのバックナンバーや、それらに掲載されている作品などから、映画、テレビ、ラジオという戦後日本の多様なメディアの中で、「教育」と「消費」の間で言説的・制度的に対象化されていく年少観客の動向をさらに精査していきたい。

(わたなべ だいすけ/日本映画史・映像文化論、跡見学園女子大学)

関西支部夏期映画ゼミナール

豊原 正智

夏期映画ゼミナール計画について

日本映像学会関西支部の「夏期映画ゼミナール」は、1977年の第1回から、途中78,79年の2回を除いて、毎年恒例の研究会として、涼しい洛北の地、京北町の京都府立ゼミナールハウスで開催されてきました。今年で37回を数えますが、大多数の参加者が、関西を中心とする大学教員及び学生・院生でしたが、ここ数年各大学の様々なスケジュール等の変更により減少し、また、上映機材の持ち込み費用、人件費等が年々嵩み、参加費のみの運営が困難になりました。本学会の研究補助費の助成を受けつつ、毎回日本映画のフィルムを無償で提供していただいている京都府及び京都府京都文化博物館のご協力を得て、昨年(第36回)「メロドラマの世界」から同文化博物館のフィルムシアターで、従来通り3日間のプログラム上映とシンポジウムを開催することといたしました。これまでの二泊三日の泊まり込みで口角泡を飛ばした夕食後の部屋での伝統的談論風発の醍醐味はなくなり、その点は寂しい限りですが、近くの安い旅館に泊まり込んで、あるいは通ってまた復活させることは無きにしても非ずで、その可能性も考えたいと思っています。

文博での再出発は、博物館友の会及び一般の参加者を含め盛況裏に行うことができました。中京区三条高倉というロケーションのよさが、京北町での学会の研究会という性格を越えて多くの一般の参加にも繋がったのではないかと思います。このことはまた、日本映像学会および関西支部の活動のPRにもなったのではないのでしょうか。

今年度も、京都文化博物館で、9月4、5、6日の三日間を予定しています。今第37回は、「脚本家・依田義賢」をテーマとして開催いたします。第14回(1992年7月17日～19日)で、前年に82歳で亡くなられた依田先生を追悼し、「追悼・依田義賢特集」を開催しました。シンポジウムでは、ご子息、依田義右、義丸ご兄弟、今は亡き山田幸平、吉岡敏夫両先生をパネリストにお迎えしました。以来、四半世紀になんなんとする今年、再び「依田義賢」を採り上げることになりました。その背景には、大阪芸術大学芸術研究所の出版助成により、同大学教授並びに日本シナリオ作家協会理事長の西岡琢也氏を中心に編まれた『依田義賢人とシナリオ』が昨年6月に上梓されたことがあります。西岡氏の「時代は移ろい、映像学科の学生でさえ『脚本家・依田義賢』の仕事を知る者も少なくなった」という編集後記での嘆きを今回の夏期映画ゼミナールで何とかしたいという個人的な希望もあります。

小津安二郎、黒澤明と共に日本映画を代表する溝口健二と組んだ依田義賢の作品『浪華悲歌』『祇園姉妹』『西鶴一代女』『雨月物語』等を中心に山本薩夫、田中徳三、今井正、熊井啓等との作品を上映の予定です。また、シンポジウムでは、司会を遠藤賢治会員、パネリストとして西岡琢也、依田義右(大阪芸術大学名誉教授)、大津一郎(脚本家)、原一男(映画監督)の各氏をお願いしています。尚、正式な内容は、本年度の京都造形芸術大学での大会時にお配りするチラシでご案内することにしていきます。

今後とも、京都文化博物館のご協力を得て、日本映像学会関西支部のこの伝統ある「夏期映画ゼミナール」盛り上げていき、若い会員の中から優秀な日本映画研究者が輩出されんことを願っております。

(とよはらまさとも／関西支部夏期映画ゼミナール代表、大阪芸術大学)

西部支部

伊原 久裕

西部支部では、下記のとおり平成26年度研究例会ならびに支部総会を開催した。

日時：平成27年1月24日(土)15時～18時

会場：九州大学大橋キャンパス(5号館531教室)

研究発表1 伊原久裕(九州大学大学院芸術工学研究院)

視線の劇場：ノーマン・ベル・ゲデスの戦場模型写真

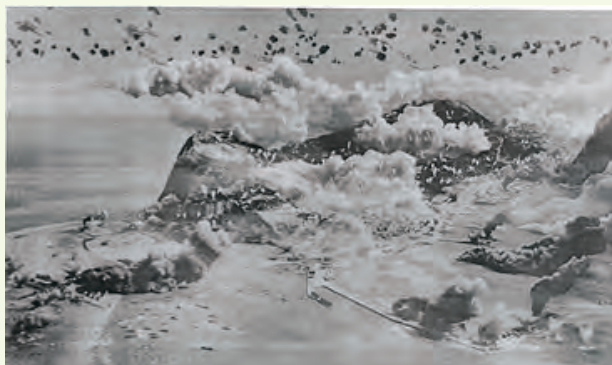
発表概要

工業デザイナーのノーマン・ベル・ゲデス(Norman Bel Geddes, 1893-1958)による1939年のニューヨーク万国博覧会のゼネラル・モーターズ館で展示された《フューチャラマ》は、空前の観客を動員したアトラクションとしてよく知られている。しかし、フューチャラマと同時期に制作が開始され、第二次大戦中に雑誌『ライフ』の誌上で発表された戦場模型写真の存在についてはこれまであまり注目されることがなかった。発表では情報デザイン史の立場からこの戦場模型写真を取り上げ、情報デザインとしての特性について考察した。戦場模型写真の事業は、もともとは風雲急を告げる当時のヨーロッパ戦線の戦況報道を目的としたレリーフ地図として構想され、ゲデスは新聞社や軍への売り込みを図っていた。太平洋戦争が勃発するとライフ誌が採用し、1942年5月25日号の珊瑚海海戦を伝える記事に始まり、以降1944年までほぼ継続し、全部で約20本の模型写真を用いた記事が同誌に掲載された。戦場模型写真は、フューチャラマと同じく精巧な模型と地形からなるダイオラマを撮影した写真であるが、実在の地形を対象としており、最初から写真撮影を前提として制作されている点でフューチャラマとは異なる。

情報デザインの観点から、この写真が注目される理由のひとつは、それが同時代特有の視覚文化の文脈において写真と地図という2つの視覚ジャンル双方に関わったかたちで形成された表現だという点にある。写真としてのあり方については、雑誌『ライフ』というメディアのなかで果たした役割が重要となる。グラフ雑誌として成立したライフのリアリズムの形式にもっともかなう表現手段は写真であるが、記事によっては写真の使用が不可能な場合が当然あり、そうした場合には即席のイラストレーションが使用された。ゲデスの模型写真は、その問題を回避する理想的技法と見なされた可能性が高い。また、ライフが得意とした組み写真記事において、模型写真による情景描写は当然ながら地図やイラストよりも他の写真との高い親和性を実現した。さらに写真撮影自体にも工夫が凝らされ、航空機の窓枠越しの情景を演出するなど爆撃手や搭乗員の主観的視線を意識した映像も制作されていた。他方で模型写真の基盤は正確なレリーフ地図であったことから、模型写真に文字や補助図形を付加することで、地図や鳥瞰図としても用いられた。地図に関しては、戦時中のアメリカで担った社会的役割を前提とする必要がある。すなわち第二次大戦に参戦したアメリカにとって、世界全体の地理的イメージを国民が共有する手段として地図はきわめて重要であった。地図デザイナーのリチャード・エディス・ハリソンが描くパースペクティブ地図は、こうした要請に応える形式を持つもっともポピュラーな地図となっていたが、ゲデスの模型写真も同列の表象と見なし得るものである。このように、ゲデスの戦場模型写真は、写真と地図の中間的存在として捉えることが可能である。戦場模型写真のもうひとつの重要な特徴は、制作される情景が専門的な戦術の見地から緻密に構成された戦場の形態であり、戦略的要求にも耐えられる構成となっていたことである。もとも

とゲデスは全米屈指のウォーゲームの専門家でもあり、たとえば艦隊のフォーメーションや敵前上陸の過程などについてもリサーチに基づいて再現されていた。1944年春に、ニューヨーク近代美術館でゲデスの戦場模型を用いた展覧会が開催されたが、展覧会では写真を中心としつつも一部にジオラマが展示され、展示期間中に制作風景を観賞できるようになっていた。また、この展覧会のためにいくつかの新しい模型写真が制作されたが、そのひとつに実施予定のヨーロッパ大陸への上陸作戦を予想したシミュレーション場面が含まれていた。オランダの海岸を想定した上陸作戦の様子が、航空機による煙幕や上陸用ボートなどの模型を用いて再現された。1944年の6月6日のノルマンディ上陸作戦の一週間後の12日発行の特集号にこのゲデスの写真が掲載され、上陸がどのように行われたのかを説明する参考資料として用いられた。

ゲデスは終戦後に、海軍からミッドウェイ海戦の様子を再現する戦場模型写真制作の依頼を受けている。この依頼では「記録」としての写真を作成することになったが、彼の信念である「想像力が実在を作り出す」というスローガンが示唆するように、模型写真はゲデスにとっては未来の可能性をシミュレートする用法に本義があったと思われる。いずれにしても、ゲデスの写真が描く戦場の空間は、「かつて起こった出来事、起こったかもしれない出来事、これから起こるかもしれない大きな出来事」の三つの様相を区別することなく書き込み可能な地理空間でもあったと言える。



戦場模型写真：ドイツ軍によるジブラルタル攻略の予想（1944）

研究発表2 黒岩俊哉（九州産業大学芸術学部）

「舞踏・音響・映像パフォーマンスの可能性—「響存人間展」から「映像音響詩《KYOZON 2014》」までの足跡—」

作品「映像音響詩《KYOZON 2014》」は、2014年5月に開催された「響存人間展〈肉/声〉」に由来する。

これは福岡市のギャラリー風が企画するシリーズのひとつで、15回のタイトル毎に、各分野のアーティストらがコラボレーションし、展示を行う¹⁾。〈肉/声〉では音響に九州大学芸術工学院の中村滋延、身体/舞踏に原田伸雄、そして映像を筆者が担当した。

1) 「響存人間展〈肉/声〉」とパフォーマンス「響存—光と闇の音—」

会場の壁の一面には、原田の舞踏が映しだされている。これは氏の過去数年にわたる公演を黒岩が撮影し再構成した実験映像である。それと同時に、中村滋延の音響作品が再生されている。公演の中から原田の肉声や環境音を抜き出し、それらを素材に実験音楽として構成したものである。

映像は約34分、音響（声）約17分が、個々に繰り返し再生される。会期中は、再生タイミングの違いによって、これら二つが同時軸上に現れることはない。投影された原田の姿（肉体）と、音で再現されたイメージ—肉声、息づかいや、すり足の摩擦音とはシンクロしない。

さて展示空間には「①展示された過去（記憶）の原田＝身体/映像」「②音響/映像の中の身体＝みられるもの＝現在」「③作家らによって再構成された新たな身体＝音響/映像によるあらたなイメージ」の三つが同時に存在している。さらに会期中の一日²⁾、原田の公演を会場で行う。観客は映像/音響/舞踏を観ることで、前述の三層（相/次元）に「④今（舞踏の身体性と消滅性）」「⑤観客の眼＝まなざし」が加わり、5層のレイヤーが重なりあう。

ここでは偶然性を意図的に作り出し、肉体とは、あるいは映像/音響（イメージ）とは何かを考察することが、作家らの目的でもあった。観客も含めた会場は、原田の肉体をハブとし、それぞれの作品がぶつかりあうトポスとして機能した。

2) 「映像音響詩《KYOZON 2014》」

時を経て中村の音響作品が、氏の所属する先端芸術音楽創作学会において公演の機会を得る³⁾。作品「映像音響詩《KYOZON 2014》」は中村の音響に筆者の映像を再構成したものだ。これは前出の展示映像に、さらに会期中に行われた原田の公演映像を昇華するという好機ともなった。

さて、そうして結実した「映像音響詩《KYOZON 2014》」には、④の原田の肉体はない。映像や音声が再表象するイメージのみである。展覧会にあったハブとしての肉体は、作品がメディアとなる瞬間に消滅する。音響/映像作家は、記憶（幻想）の原田の姿、つまり肉体のイメージの総体のみを手がかりに作品を構成する。

この二つの事例は、作品とは何か、作家とは何かという本質的な問いを明示することとなる。これらは異なった分野の表現が融合することで表出した結果であるが、ここに映像表現の未知の可能性を確認することができる。

（文章中敬称略）

注

1 2014年5月5日（月）-11日（日）/ ギャラリー風（福岡市）

2 2014年5月10日（土）

3 2014年7月26日 / 先端芸術音楽創作学会第20回研究会 / 玉川学園チャペル（東京都町田市）


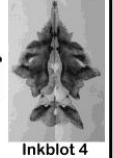
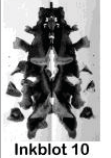
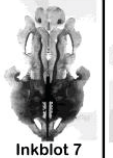



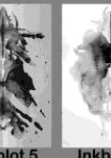
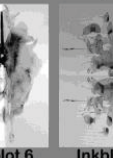
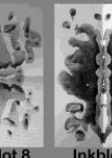
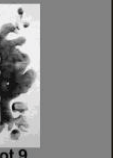
【学生発表】イヤード・アルサ・ブニー（九州大学芸術工学府）

対称イメージの視覚的解釈に基づいたキャラクターデザイン方法
発表概要

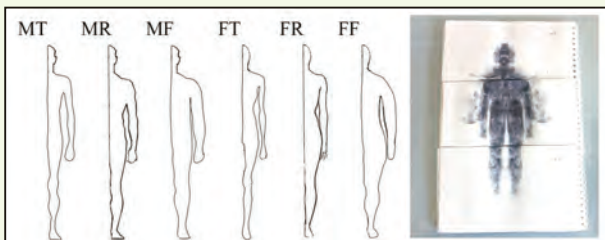
アニメーションやゲームのキャラクターのデザインを発想するには、通常はスケッチなどの描画が用いられるが、描画のスキルと発想能力の低い初心者にとって容易な作業ではない。本発表では、そうした初心者も含め、発想と描写に関する制約から比較的解放された状態でキャラクターが創作できる方法として、インクプロットなど自由連想を触発する対称イメージを用いたキャラクターのデザイン方法について報告した。インクプロットでよく知られているのは、心理学者のロールシャッハの開発したテストのイメージである。最初の実験ではこのインクプロットを多数制作し、被験者にその素材からキャラクターをデザインすることを想定して、自由にインクプロットから浮かぶイメージを描くよう指示

を与えた。その結果、描かれた対象は、キャラクターの全身像と顔、対象の種類は「人間」、「クリーチャー」、「動物」、「その他」にそれぞれ分類された。傾向を分析した結果、被験者はシルエットを知覚していること（70%）、キャラクターとして有用であるには、制御することなどがあった。

その結果を受けて、次の実験ではあらかじめシルエットを5種類の人型に限定した型紙を用いて制作したインクプロットイメージの首、胴体、足の3つの部分から成り立つフリップブックを作成した。このフリップブックを用いた実験を再度行った。結果としてはキャラクターの幅がある程度限定されたが、クリーチャーなどのキャラクターが多いなどの偏る傾向が見られた。発表では最後に、パソコンにカメラで画像をリアルタイムで取り込み、それを見ながら画像を制作する、シンメトリーのイメージを得るより簡便な方法を紹介した。最後に、これらの方法は、熟練者にとっては必ずしも有効とは言えないが、未経験者にとっては初期の手がかりとしては有効であり、キャラクターデザインの現場の実際の作業では、コミュニケーションとしてのツールとして有用である可能性が示唆された。

		Interpreted Character Type				
		Human	Creature		Animal	
Interpreted character part	Head					
	Inkblot 1					
Body						
	Inkblot 4	Inkblot 10	Inkblot 7	Inkblot 2	Inkblot 3	
	Disqualified Inkblot					
	Inkblot 5	Inkblot 6	Inkblot 8	Inkblot 9	Inkblot 9	

インクプロットの分類 (上)、インクプロットを用いたフリップブック (下)



総会

研究発表後に支部総会を開催した。平成27年度活動計画として、福岡市図書館で開催予定のイメージフォーラム・フェスティバルでの講演会協賛事業案、研究例会の開催案が提案され、了承されました。

以上

(いはら ひさやす/西部支部担当常任理事、九州大学)

支部・研究会だより

中部支部

伏木 啓

<報告>

中部支部では、2014年度第三回研究会を下記の通り開催した。

■ 2014年度日本映像学会中部支部第3回研究会

日時：2015年3月14日(土) 13:30～18:00

会場：愛知淑徳大学長久手キャンパス(愛知県長久手市片平二丁目9) 11号棟 1F ミニシアター



◎第一部：講演 13:35～14:05

山口良臣会員(名古屋市立大学芸術工学部教授)

タイトル『装置あるいは仕掛けとしてのアート』

要旨：作品とは、なにかを感じるための、あるいはいつもとは違った経験をするための装置(仕掛け)だ、と考えてみる。



◎第二部：研究発表(2件) 14:10～15:15

吉村いづみ会員(名古屋文化短期大学生活文化学科教授)

タイトル『R. W. ポールが捉えた英国 ―イギリス初期映画の題材について』

要旨：ロバート・ウィリアム・ポールは、パート・エイカーズとともにイギリスに商業映画を導入した最初の英国人である。ポールが1896年から1900年に撮影したフィルムの題材の推移を、質的・量的に考察したところ、興味深い結果が得られた。

今回の発表では、五年間にわたりポールが撮影した主要な題材を経年的に見ていくことによって、イギリスにおける初期映画の特徴を提示し、ポールの映画が<親近感のある、帰属意識としての国民性(ナショナル・アイデンティティ)>の生成にどのように関与していたかを明らかにしたい。

今井瞳良氏(名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程)
タイトル『居住空間イメージの戦後——1960年代団地映画における主婦を中心に』

要旨: 団地は戦後の住宅不足を解消するために、1955年に設置された日本住宅公団によって、展開された。団地は1958年に『朝日ジャーナル』が作り出した「団地族」という言葉に象徴されるように、メディアによって形成されたイメージを伴って、人気を博していく。日本映画では、1960年前後から団地が登場するようになり、団地イメージ形成の一翼を担っていた。これまで、団地研究では、自治会が主婦たちを中心として展開されていたことが明らかにされてきた。また、映画の中の団地については、1970年代に登場する団地妻映画の主婦たちについての研究がなされている。本発表では、1960年代の団地映画において、主婦たちがどのように描かれていたのかを考察する。団地の主婦たちは家電や住宅設備によって、立ち上がる身体を獲得するとともに、交流の場を階段や公園・集会場といった公共空間へと移していった。この身体と公共空間に着目して、『私は二歳』(市川崑監督、1962年)や『彼女と彼』(羽仁進監督、1963年)を分析することを通して、団地の主婦たちは母親であることに価値が与えられており、そうした主婦のあり方が政治性を持っていたことを明らかにする。

◎第三部: 学生作品プレゼンテーション 15:30 ~ 18:00

愛知淑徳大学

- ・character | アニメーション | 2m | 鈴木智捺 (メディアプロデュース学部メディア表現コース2年)
- ・rebirth | アニメーション | 1m | 佐野史織 (メディアプロデュース学部メディア表現コース2年)
- ・Tokoname night swim | アニメーション | 6m | 常滑ナイトスイム制作チーム (メディアプロデュース学部メディア表現コース 萩原ゼミ有志)

名古屋芸術大学

- ・INSIDE | 映像作品 | 10m | 山口諒 (大学院 同時代表現研究領域1年)
- ・a Arched | 映像作品 | 2m50s | 和泉成彦 (デザイン学部デザイン学科メディアデザインコース4年)
- ・日々を過ごすということ | 映像作品 | 9m4s | 田口愛子 (デザイン学部デザイン学科メディアデザインコース2年)
- ・アイデンティティ・クライシス | 映像作品 | 2m | 村山季里子 (デザイン学部デザイン学科メディアデザインコース4年)

名古屋学芸大学

- ・pm 04:28 | 映像インスタレーション | 5m (プレゼン用映像の上映) | 所遥菜 (映像メディア学科4年)
- ・prct-0204 | アニメーション | 4m55s | 足立一馬 (映像メディア学科3年)
- ・しれいめ | アニメーション | 4m20s | 森あおい (映像メディア学科3年)

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

- ・"Parking" HD II プロジェクトでの習作 | 映像 | 11m (プレゼン用) | 伊藤大作 (メディア表現研究科1年)

静岡産業大学

- ・Attempt to iconographic representation of the character 2 | インスタレーション | 3m7s (ダイジェスト映像) | 加藤誠 (情報デザイン学科4年)
- ・時の取束 | 映像作品 (実写) | 2m55s | 大石雅人 (情報デザイン学科2年)
- ・モモタロウ | 映像作品 (アニメーション) | 3m40s | 松永大樹・奈加涉 (情報デザイン学科2年)

愛知県立芸術大学

- ・LANDMARKS | ビデオインスタレーション | 24m (ループ) | 中橋広光 (デザイン専攻環境デザイン領域4年)

椋山女学園大学

- ・去り行く芸 | 映像作品 (ドキュメンタリー) | 18m45s | 井上知美 (メディア情報学科4年)

以上

(ふしき けい / 中部支部担当常任理事、
名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科)

ショートフィルム研究会

林 緑子

事業報告並びに研究計画

- 東海地方における映像文化の受容促進について -

2014年度研究会活動助成の交付を受けて、ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で1件の企画を開催いたしましたので、ここに報告いたします。また、2015年度の活動として、以下3件の開催を計画しています。

開催終了企画の事後報告

第9回活動

会期名 JJJO ★ SUKIMAKI - 人形劇とアニメーション -

期日 公演: 2015年1月24日(土)15:00-16:30 展示: 2015年1月5日(月)-1月28日(水)13:00-21:00

来場者数 上映: 13名 展示(延べ): 41名

内容 公演、関連展示

会場 シアターカフェ (〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24、マエノビル2階)

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会



アニメーション作家・鋤柄真希子(SUKIMAKI)氏と、人形操者・阪東亜矢子(JJJO)氏の、作品上映・上演と、制作についてのアフタートークを行った。

①アニメーション作品上映「雪をみたヤマネ」(6:15/2010年) 監督: 鋤柄真希子、撮影: 松村康平、音楽: 前河愛祐

②マリオーション(映像+人形劇)作品上演「かたつむり」(8:00/2012年) 制作: JJJO ★ SUKIMAKI

③アニメーション作品上映「WHILE THE CROW WEEPS- カラスの涙 -」(8:00/2013年) 監督: 鋤柄真希子、脚本・撮影: 松村康平、音楽: 竹村延和

④人形劇作品上演「おっばい」(30:00/2013年) 制作: JJJO

⑤アフタートーク

それぞれの制作手法と活動内容についてお話いただいた。鋤柄氏は、主にカット・アウトと置き換えの手法でコマ撮りをし、アニメーションを制作している。マルチプレーン撮影台を模した自作の撮影台で、撮影

素材を置くガラス板を、垂直に並べて設置する場合と、水平に立てて設置する場合がある。鋤柄氏は、国内外映画祭での作品上映が主な発表の場とのこと。坂東氏は、主に、糸操り人形、棒人形、手遣い人形などを使う。人形は、脚本に合わせたデザインをし、粘土や樹脂、木材など、軽くて丈夫な素材で制作する。実際に、自作の糸操り人形を見せながら紹介し、来場者が手に取ることもできた。今回のように、全て自作の上演をする場合と、通常、仕事として、他の劇団や所属する劇団で人形操者として、民話や創作劇を演じる場合があるとのこと。また、二人で活動する際は「JIJO ★ SUKIMAKI」という名義で、「いいだ人形劇フェスタ」などで作品発表をしている。上映とトークを通じ、アニメーションや人形劇の制作面や、活動方法を知る機会となった。



第 10 回活動

会期名 若見ありさ氏(日本映像学会会員)による、上映+講演+展示

期日 2015年10月以降予定

内容 上映、講演、展示など

会場 シアターカフェ

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨 若見ありさ氏を始めとし、3名のアニメーション監督により制作される出産がテーマの、ドキュメンタリー・アニメーション作品(平成26年度文化庁芸術振興費補助金 助成対象作品)を軸に、講演や展示を行う(予定)。

第 11 回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング2015

期日 2015年11月予定

内容 上映、交流会

会場 未定

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会

主旨 東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、全国からの公募作品による上映会を開催する。

公式HP <http://filmm.info/>

第 12 回活動

会期名 ALIMO 氏による、上映+講演+展示
 期日 2016 年 1 月頃予定
 内容 上映、講演、展示など
 会場 シアターカフェ
 主催 シアターカフェ
 共催 日本映像学会ショートフィルム研究会
 主旨 国内外で映像制作や展示を行う ALIMO 氏の映像作品の上映と講演、展示を行う。

■ ALIMO 氏プロフィール

1977 年山口県生まれ。美術作家。エストニアと日本を拠点に活動。多摩美術大学油画専攻を中退後に、医療カメラマン、インド留学を経て 2012 年東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了後、渡欧しブリート・パルンに師事。孤独なオブジェを繋ぎ、その先にある沈黙によって領土や信仰、所有という、ある二つのイメージの間にある、見えたり見えなかったりする存在の痕跡をヴィジョンとする。「アニメーション・タプロー」という独自の的方法論の下、アニメーションの持つ構造からシュルレアリスムの新しい可能性を見出し、それらを実験的に試みている。物語のある作品を「メルヘン」、実験性の強い作品を「遊び」と呼び分類している。主な活動に Move on Asia (ZKM/2013 年)、第 16 回文化庁メディア芸術祭・アート部門、第 31 回バンクーバー国際映画祭、第 21 回ザグレブ国際アニメーション映画祭、第 11 回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞、平成 24 年度文化庁新進芸術家海外研修員、平成 25 年度ポーラ美術振興財団在外研修員。

以上

(はやし みどりこ/ショートフィルム研究会代表)

支部・研究会だより

関西支部

中村 聡史

関西支部では、加藤哲弘会員、桑原圭裕会員のお世話により、下記のとおり平成 27 年度関西支部第 7 回研究会を行いました。

日時：平成 27 年 3 月 28 日 (土) 午後 2 時 (14:00)

会場：関西学院大学大阪梅田キャンパス (K.G. ハブスクエア大阪)

研究発表 1：1970 年代における「劇画」を原作とした映画の過剰さについて

～三隅研次・鈴木則文・伊藤俊也の作品を中心に～

発表者：関西学院大学 中村聡史会員

研究発表 2：エドワード・ヤンの映画における主体・視線のずらしと利他的人生の倫理

発表者：近畿大学 吉岡ちはる会員

いずれの発表も活発な議論が行われ、刺激的で有意義なものでありました。内容等の報告については次号で行いたいと思います。

今後の活動としましては、日本映像学会第 41 回大会を 5 月 30 日 (土)・31 日 (日) に、京都造形芸術大学で行います。すでに、40 件を超える研究発表、10 件を超える作品発表の申し込みがあり、今年度の大会も盛況なものになるかと思われます。

関西支部の研究会につきましては第 75 回研究会を 5 月 9 日 (土) に近畿大学、第 76 回研究会を 11 月 28 日 (土) に神戸芸術工科大学・グランフロントキャンパスで開催する予定となっております。第 77 回

編集後記

総務委員会

■ 学会員の皆様、列島を桜前線が北上している只中、会報 170 号をお届けします。168 号、170 号会報の「展望」にて今期正副会長ののお考えが示されました。そこには共通の展望が見て取れます。映像学会会報は 153 号より電子版となり、だれでも、どこでも、いつでも Web 上で閲覧可能となっています。この機会にバックナンバーを見直していただければ幸いです。(橋本)

FORUM

フォーラム

■ 第 6 回 (平成 27 年度) 日本学術振興会育志賞

推薦受付期間：平成 27 年 6 月 10 日～6 月 12 日

日本学術振興会は、天皇陛下の御即位 20 年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成 21 年に陛下から御下賜金を賜りました。

このような陛下のお気持ちを受けて、日本学術振興会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、平成 22 年度に「日本学術振興会 育志賞」を創設しました。

<http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>

http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html', 'JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会', and contact information for the organization."/>

研究会は開催校は未定ですが、平成 28 年の 3 月に予定しております。

また、第 35 回夏期映画ゼミナールを 9 月の初旬に 3 日間の日程で開催を予定しております。開催日等は現在調整中で、会場は昨年度と同じく京都文化博物館のご協力を得ましてそちらで行います。テーマは「依田義賢 人とシナリオ」です。上映作品は未定ですが昨年どおり 7 本程度の作品を上映し、シンポジウムの開催も予定しております。

以上

(なかむら さとし/関西支部担当常任理事、関西学院大学)